

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

主の御用

――マルコ伝第11章1～26節――

1965年3月14日

小池辰雄

無礙の一道 来臨者 エルサレム入城 依行 主の御用 葉のみの信仰 祈りの家 無私の祈り 神の信を持って キリストの心を入れる キリストは最高の霊 すでに得たりと受けとれ

【マルコ11・1～26】

「彼らエルサレムに近づき、オリブ山の麓なるベテパゲ及びベタニヤに到りし時、イエス二人の弟子を遣さんとして言い給う、²『むかいの村にゆけ、其処に入らば、やがて人の未だ乗りたることなき驢馬の子の繋ぎあるを見ん、それを解きて牽き来れ。³誰かもし汝らに「なにゆえ然するか」と言わば「主の用なり、彼ただちに返さん」といえ』⁴弟子たち往きて、門の外の路に驢馬の子の繋ぎあるを見て解きたれば、⁵其処に立つ人々のうちの或者『なんじら驢馬の子を解きて何とするか』と言う。⁶弟子たちイエスの告げ給いし如く言いしに、彼ら許せり。⁷斯て弟子たち驢馬の子をイエスの許に牽ききたり、己が衣をその上に置きたれば、イエス之に乗り給う。⁸多くの人は己が衣を、或人は野より伐り取りたる樹の枝を途に敷く。⁹かつ前に往き後に従う者ども呼わりて言う『ホサナ、讃むべきかな、主の御名によりて来る者』¹⁰讃むべきかな、今し来る我らの父ダビデの国。」「いと高き処にてホサナ」¹¹遂にエルサレムに到りて宮に入り、凡ての物を見回し、時はや暮に及びたれば、十二弟子と共にベタニヤに出で往きたもう。

¹²あくる日かれらベタニヤより出で来りし時、イエス飢え給う。¹³遙に葉ある無花果の樹を見て、果をや得んと其のもとに到り給いしに、葉のほかに何をも見出し給わず、是は無花果の時ならぬに因る。¹⁴イエスその樹に對いて言いたもう『今より後いつまでも、人なんじの果を食わざれ』弟子たち之を聞けり。

¹⁵彼らエルサレムに到る。イエス宮に入り、その内にて売買する者どもを逐い出し、両替する者の台、鵲を売るものの腰掛を倒し、¹⁶また器物を持ちて宮の内を過ぐることを免し給わず。¹⁷かつ教えて言い給う『わが家は、もろもろの国人の祈の家と称えらるべし』と録されたるにあらずや、然るに汝



らは之を「強盜の巢」となせり」¹⁸祭司長・学者ら之を聞き、如何にしてかイエスを亡さんと謀る、それは群衆みな其の教に驚きたれば、彼を懼れしなり。

¹⁹夕になる毎に、イエス弟子たちと共に都を出でゆき給う。

²⁰彼ら朝早く路をすぎしに、無花果の樹の根より枯れたるを見る。²¹ペテロ

思い出して、イエスに言う『ラビ見給え、詛い給いし無花果の樹は枯れたり』

²²イエス答えて言い給う『神を信ぜよ。²³誠に汝らに告ぐ、人もし此の山に「移

りて海に入れ」と言うとも、其の言うところ必ず成るべしと信じて、心に疑

わずば、その如くなるべし。²⁴この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願う事は、

すでに得たりと信ぜよ、然らば得べし。²⁵また立ちて祈るとき、人を怨むる

事あらば免せ、これは天に在す汝らの父の、汝らの過失を免し給わん為なり』

〔²⁶なし〕

●無礙の一道

今、司会者が言いましたように、今日はイエスの受難週間の第一日というわけです。一週間が本当に一週間かは、ちよつと分かりませんが、大体、そういうように数えられていくようです。エルサレム入城ということはルカ伝9章51節を見ると、ガリラヤからエルサレムへ前進されるときに、

「⁵¹イエス天に挙げらるる時満ちんとしたれば、御顔を堅くエルサレムに向け

て進まんとし」(ルカ9・51)

と書いてあります。「無礙の一道」という言葉があるが、イエスはこのエルサレムへの無礙の一道を進んで来られて、かたく眼をエルサレムに向けて、先頭をきつて前進されたわけです。昔の侍も、武将が馬に乗って先頭をきつて突進していく。この頃は、後ろの方でいろいろやっているようですが、昔の侍は先頭をきつて行くことがしばしばあったわけです。イエスもそのように、この場合は全く先立って前進された。ある場合にはイエスは、本当にしんがりの存在ですが、またあるときは先頭である。しんがりであるということと、先頭をきくということは実は一つなんです。

「我は始めにして終りなり」

と言われますが、態勢からいっても、全軍をその先頭とまたしんがりにおいて掌握しているような在り方です。けれども、キリストの進軍は結局、最後は彼一人です。預言書にも言われているとおりに、後でみな羊たちは牧人を棄てて――ゼカリヤ書13章に書いてあるとおり――散ってしまう。それはもう既にキリストは御存知です。しかし、やがて本当の神の戦にたずさわるところの後続部隊は、イエスが天界に行ってから本当に始まるので、散ったと思った使徒たちがはじめて目覚めて、今度は本当にキリストに付き従っていくことになる。そういう凄い見通しをつけたところのキリストの前進です。そういう勝ち戦の、



いよいよ敵の本城エルサレムに今、立ち入るという場面です。

●来臨者

「彼らエルサレムに近づき、

これはマタイ、マルコ、ルカ、みな同じような記事が載っていますが、いちいち比較しませんが、

オリブ山の麓なるベテパゲ及びベタニヤに到りし時、

なにかこの言い方がちよつとおかしいので、学者が頭を悩ますわけですが。地理的にいうと、ベテパゲはエルサレムの東南にあたる。ベタニヤはもつと東の方になるわけで、ちよつと順序が逆みたいなのは、はつきりしないわけです。しかし、要するにオリブ山の麓の近所に来られたということは間違いない。ベタニヤは、時々ここにまた戻つて来られては宿つた所です。

イエス二人の弟子を遣さんとして言い給う、²『むかいの村にゆけ、

「むかいの村」というのが何だかわからないので、これがベテパゲではないかなんてことを言いますが、どうでもいいです。

其処に入らば、やがて人の未だ乗りたることなき驢馬の子の繋ぎあるを見ん、それを解きて牽き来れ。³ 誰かもし汝らに「なにゆえ然するか」と言わば「主の用なり、

今日は、「主の御用」と題したのもこの言葉によるわけですが、

彼ただちに返さん」といえ⁴ 弟子たち往きて、門の外路に驢馬の子の繋ぎあるを見て解きたれば、⁵ 其処に立つ人々のうちの或者『なんじら驢馬の子を解きて何とするか』と言う。

マタイ伝の方がもう少し詳しく書いてある。まだ人が乗ったことがない驢馬の子というのは、ゼカリヤ書9章に預言がある。

「⁹シオンの女よ大に喜べ、エルサレムの女よ呼われ。

「シオンの女」「エルサレムの女」という言い方は「シオンの市民たち」ということです。

視よ、汝の王汝に来る。彼は正義して拯救を賜り柔和にして驢馬に乗る。即ち牝驢馬の子なる駒に乗るなり。¹⁰ 我エフライムより車を絶ち、エルサレムより馬を絶ん、

戦車や軍馬のことです。

戦争弓も絶るべし。彼国々の民に平和を諭さん。その政治は海より海に及び

河より地の極におよぶべし。」（ゼカリヤ9・9～10）

そういう、戦を終わらせ平和をもたらすところの君がやって来る。この「来る」ということ。イザヤ書40章10節に、



「¹⁰ みよ主エホバ能力^{ちから}をもちて来^{きた}りたまわん」

という言葉がありますが、「来臨者」ということです。来臨者ということは、「メシヤ」ということと同じことなんです。マタイ伝の後の方に、

「ダビデの子にホサナ」

という言葉が出てくるでしょ。「ダビデの子」は即ち「メシヤ」です。ヘブライ語では「マシアハ」という。即ち、救をもたらすために来る者です。

●エルサレム入城

キリストはしばしば、透視をなさる。予見をなさったり、距離的に透視がきいたり、時間的に将来のことの、要するにどつちにしろ空間的にも時間的にも見通しがきくわけです。この場合も、空間的な見通しがきいているわけで、望遠鏡によったのでも、リーダーによったのでもない。そういった驢馬の子がいるということがちゃんと見えてしまった。そしてこれが、自分がエルサレムに入っていく時にちょうど、ゼカリヤ書9章の預言のごとくなるといふ、なんとも不思議なことです。民数紀略19章にも出ている。

³ 誰かもし汝らに「なにゆえ然^{しか}するか」と言わば

乗ったことのない驢馬を、いきなり人にも断らないで、つないである紐を解けば、人が疑問に思うわけですね。そうしたらば、

「主の用なり、彼ただちに返さん」といえ」

と。なにも盗むのではない。

⁴ 弟子たち往きて、門^{かど}の外の路に驢馬の子の繋ぎあるを見て解きたれば、⁵ 其処に立つ人々のうちの或者^{あるひと}『なんじら驢馬の子を解きて何とするか』と言う。

⁶ 弟子たちイエスの告げ給いし如く言いに、彼ら許せり。⁷ 斯^{かく}て弟子たち驢馬の子をイエスの許に牽ききたり、己が衣をその上に置きたれば、イエス之に乗り給う。

上衣を乗せて、鞍の代わりにしたわけです。裸驢馬ですから。

⁸ 多くの人は己が衣を、或人^{あるひと}は野より伐^きり取りたる樹^きの枝^{みち}を途^{みち}に敷く。

結婚式のときには白布を引きますが、キリストの入城の時にもそういった道を備えるわけです。

⁹ かつ前に往き後に従う者ども呼^{よば}わりて言う『ホサナ、讃^ほむべきかな、主の御名によりて来る者』

「ホサナ」というのは、「ホシユアナ」という「ヨシユア」という字が語源で、「救い」という字です。「救いたまえ」ということです。この場合はほとんどそれが讃美の気持で、「祝福あれ」とか「幸いあれ」とかいうことに使っていたらしい。これは詩篇118篇25、26節をちよつとお開きになつてごらん下さい。これはルターの非常に特愛した詩篇の一つで、向



この教会では結婚式のときによく引用する詩篇です。

「²⁵エホバよねがわくはわれらを今すくいたまえ。エホバよねがわくは我らをいま栄えしめたまえ。²⁶エホバの名によりて来るものは福^{さいわ}いなり。われらエ

ホバの家よりなんじらを祝せり。」（詩篇118・25～26）

とある。この場合の「主」というのはもちろん「神さま」のことを言っているわけです。

¹⁰讃むべきかな、今し来る我らの父ダビデの国。「いと高き^{ところ}処にてホサナ」』

即ち彼らにはキリストの入城は、やがてエルサレムに君臨する王者であるというわけで、決して信仰的な宗教的な霊界の王者として彼らは理解しているわけではない。昔はダビデが理想的な王者であった。そのダビデ以上の、「ダビデの子」と言うだけの、全世界を統べ治めるところの王者という意味で、みな非常に喜んでしまったわけです。ところが、イエスはどっこい全然そういう王様とは違う。

「遂にエルサレムに到りて宮に入り、凡ての物を見回し、時はや暮^{くれ}に及びたれば、十二弟子と共にベタニヤに出で往きたもう。」

いっぺん入城式をやってから、それからまた下りて行って、またベタニヤに行かれたというわけです。なにかちよつと芝居みたいですけども、決して芝居でもないのです、ちゃんとそういうような神さまの深い摂理のもとにこうなったわけです。

●依行

今読んだところの、むしろ主なことは、イエスが入城されて、非常にみんなが喜んだ。そして、讃美を歌ったということがこの記事の重点なんでしょうけれども、今日は、私たちは特に

「主の用である」

ということに焦点をあててみたい。キリストが自らそういうように彼らに命ぜられたわけ

です。
主の用を果たす者は僕である。即ち、主の命令による。命令ですから、それを果たす者は僕である。実は、イエス・キリスト自身が実に主の用を果たして行った人です。主なる神の、父なる神の御用——御用学者だとか御用商人だとか、「御用」なんていうのはあまりいい言葉ではない。いわゆる御用学者みたいなことでは困りますけれども——言葉の一番根源的な意味において、神の御用を果たすために、キリストはこの地上に來られた。神の命令、神の意志をもちろん行ずるためにです。

道元の言葉には、

「依^{いぎよう}行」

という言葉がある。「帰依して行ずる」ことを依行という。仏教でいうと、禅宗の道元また法華経の日蓮というのが仏教の世界で相当——特に日蓮がその点で強かったと思うけれど



も——依行の行の世界です。行ずるということ。あの二人は意志的な坊さんですね。法然、親鸞となると、これは心の方です。心の世界。道元や日蓮の方は行の方の性格が強い。

イエスはどちらももちろん深く持つておられる。大雑把にいうと、仏教とキリスト教とどちらが行的かというと、キリスト教の方が行的なんです。だから、文化を推進させる創造力を持つている。創造的な力を持つている。

キリストは、

「汝の意志を成してください」

と祈られた。「汝の御意を——」^{みこころ}「こころ」というのは意志の「意」ですが——成してください」と。即ち、

「この私を通して成してください」

ということ。即ち、神の意志を人間は——行動的にはこの意志の面が根底になるわけですが——その汝の意志をこの私を通して成したまえという。私はその意志を成就する。そういうように全身を投じている。ただ行為と言っているのではなくて、全身をもってするとこの行、行うというのが即ち、

「主の御用に立つ」

というこの意志です。

近代人は、

「自由意志」

と言いますが、非常に自由を尊重するわけです。戦後、日本人は民主主義的な自由というものをだいたい新しく取り入れてきたわけですが、それが本当の自由でないものですから、今はどうもだいたい太平ムードです。本当の行がなかなか展開しない。またバラバラである。今朝もテレビでやっていたけれども、北朝鮮や中国が、これはいわゆる全体主義的な傾向がもちろん強いわけですが、よかれあしかれ、とにかく非常に国民的に今、行動的に力強く推進しています。非常に行動的にすべてが合理的に動いている。それに比べると、

「自由、自由」

と言っている日本人はなにか太平ムードで安閑としている面がだいぶありはしないか。冷静に省みて、とにかく憂うべき事態であると思う。彼らの人間中心であるところの、ひとつの国家の目的のための行となれば、ああいう全体主義は非常に力強く動いていく。まあ、個人の自由の問題は別問題としましてですよ。

けれども、本当に自由をもちながら、そして、本当の行為ということが出てくるためには、正にこの「依行」という言葉が表しているように、

「神に依り頼んで、神の力をいただきながら行く」

ことです。ただ意志と言ったつてしょうがない。ただ神意と言いましても。そこに大事な消息があるわけです。キリスト教会で、



「汝の御意を成させたまえ」

と、みんな主の祈りで祈っている。無教会は、ある意味において、かなり意志的な信仰であって、一応、はりがあるように見える。けれども、本当の行はやはり展開しない。本当の行が展開するためには、神の意志を本当に受けとるためには、やはり神に本当に依存する――「絶対帰依」という言葉がありますが、この「帰依する」ということ――この帰依が、パウロが言っているところの

「キリストの中に」

という世界です。

キリストの中に自分を本当に取り入れる。キリストと一つになる。とにかく、

「存在的、生命的にキリストと一つになる。キリストの生命を自分が今いびいてい
るのだ」

というときに初めて今度は、

「何を為すべきか」

という問題にかえってくる。「汝の意志を」と言つて、今度はその力が、生命が来てますから、その行が正に依行として展開するわけです。依行的な展開をする。

●主の御用

本当にイエス・キリストは神と一つで、

「われと父とは一つなり」

という。そして、「主の御意を」と言うときに、御意がただ理解されているのではない、思われているのではない。直ちにそれが行動にあらわれてくる。

言葉でもそうです。御言を受けて、その言葉を発するとき、その言葉が力をもっている。霊言である。こういう世界になると、もうこの「信・行」は決して分裂しない。我々の信仰の健全なる構造、また実質あるところの内容というものは、そういったものでなくてはならないわけです。「主の御用」と言いましても、いわゆる私たちが歴史的に聞いているような御用というような、そういったことでなくて、本当にそこに投じている。

とにかく、日本の昔の武士だとか、あるいは日本の軍人は、君命のため、主君の命令には全く水火も辞せずにそれに突入して行った、あの気合は確かにそういった意味において、本当に相手に自分を全託して、信賴して、喜んで進んで行こうという気魄があったわけです。それが今はなくなってしまった。この頃少し、それだから何か知らんけれども、テレビでだいぶあいう武士のものをやっているけれどもね。

私たちは、福音の世界でなければ、自分には本当の自由がない。自分の自由では行き詰まってしまう。グッと上から来るところの示し、力、御言、それに従って進むところには、本当の御用の自覚と共に、それが本当の自由である。本当の自由意志である。何ものにも



囚われない。神さまに、キリストに囚われることは、何ものにも囚われないということで、自分にも囚われない。

自己に囚われたところのものは決して自由ではないですから。一番これがやっかいなんです。自己に囚われない。自我というものに囚われない。我執というものがなくなるわけです。この自我、我執がとれてしまう。普通は、自由が我執的な自由であるけれども、これがとれてしまったというわけです。

「汝の意志を」と、そこにキリストの力と、キリストの実存の喜びとがある。パウロがまた、

「我は主の僕」

と言った。あの

「一切の秘訣を得たり」

と言ったパウロは、「主の僕」と言つて自らを自覚しているところのパウロです。使徒たちの中で一番行動的なのはパウロですが、そのパウロが正に僕として自覚したことによって、本当に

「御霊のあるところに自由あり」

と言つて、示されつつ伝道して行つた。マケドニアの方に行こうと思つたらば、御使が夢の中に現れてきて、

「マケドニアの方に行くな。ギリシャの方に渡れ」

というようなことも、みな、御用とあつてそちらの方へ出掛けて行つたわけです。小アジアの方をひとわたりもつと伝道したかつたと、自分の意志はそう思つたかも知れないけれども、

「いや、西へ進め」

というわけです。

これが本当に、私たちが「主の御用」という言葉を、自分の生涯の使命として、

「私の御用は、生涯をかけての御用は何であるか」

と。何を営んでおりまして——また営むことが時々変わるでしょう——とにかくそれが御用であるならば、やっていることが変わっていきましても、それは姿としては全部、一貫しているのです。そのようにして、展開また展開していく。またそれがある一つのことにつつと、事柄としても貫く場合もあります。とにかく、どのようなわけであつても、この「主の御用」という自覚が本当にあるときに、一番それが強いわけです。これが神の栄光を現していくところの行動的な在り方になる。

悟り澄ました世界だとか、ただ思われている世界だとかということではなくて、発現していく、体現していく。どうしても、この体現者ということが大事です。体現、発現していく。これはみな、何を体現するかというと、神の栄光をです。だから、「ホサナ」である。

「讃むべきかな」



と。ホサナという言葉は、さつき言いましたように、

「助けたまえ」

という言葉ですけれども、この「助けたまえ」が、栄光の讃美の言葉に変わっているわけです。

「主の名によって来たる者に神の助けあれ」

という気持がもちろん讃美の中にあるでしょうけれども、「神の助けあれ」ということと同じに、そこに

「栄光あれ、祝福あれ」

ということが派生して、だんだんそちの意味の方に移っていったということです。

●葉のみの信仰

12 あくる日かれらベタニヤより出で来りし時、イエス飢え給う。13 遙に葉

ある無花果の樹を見て、果をや得んと其のもとに到り給いしに、葉のほかに何をも見出し給わず、是は無花果の時ならぬに因る。

これは「ニサンの月」というので、今の四月ですからね、無花果が実る時ではないわけです。エルサレム入城がいわゆるニサンの月の十日とされていますけれども。

14 イエスその樹に対して言いたもう『今より後いつまでも、人なんじの果を食わざれ』弟子たち之を聞けり。

少し後の方にいきますと、20節のところに、

20 彼ら朝早く路をすぎしに、無花果の樹の根より枯れたるを見る。

とある。無花果の木に向かつて、

「今より後いつまでも、人なんじの果を食わざれ」

と。ちよつと、キリストも乱暴なことをおっしゃったようです。キリストがその時におなかが空いていたから、無花果の実を食べたかった。けれども、葉のほかは何もなかった。そして、この無花果の木を呪われたところが、枯れてしまったという。何か妙なことですけれども。

要するに、私たちが今読みますと、それは葉っぱばかりの、葉ばかりの人間ではダメだと。実がみのらなくて。信仰が葉っぱばかりの、ちよつと葉までは出るけれども、春になって葉は出るけれども、花が咲き実が稔るということにならないような、立ち消えになってしまふような、そういう信仰。それは要するに、神の生命を、キリストの生命をうちにいだかなければ、この信仰が葉っぱだけのもので、いわゆる観念信仰というのがこれです。いわゆる御利益信仰にしたってそうです。御利益でも観念でもないところの本当の信仰は、さつき言った「依行」の角度の、御意を行ずる角度の信仰です。行ずることそのことが既にこの実であるわけです。



「御意を行う者のみが天国に入ることができる」

と。神の御意を行う者即ち、神の生命を、キリストの生命をいただいて、そこに体現する者。体現するというのは、現ずるということですから。何が現ずるかということ、実が現ずるわけです。

今、自然現象においては無花果は実がみのらない時であるのに、キリストが特にこういうことをそこに示されたということは、事実をもつて示されたということは、

「いかに葉のみの信仰ではダメか」

ということ、私たちはここで読みたいと思う。そのことは同時に、キリストはこの力ある業をそこに行われたわけですから、それで直ちに、この後の方で、

22 イエス答えて言い給う『神を信ぜよ。23 誠に汝らに告ぐ、人もし此の山に「移りて海に入れ」と言うとも、其の言うところ必ず成るべしと信じて、心に疑わずば、その如くなるべし。24 この故に汝らに告ぐ、凡て祈りて願う事は、すでに得たりと信ぜよ、然らば得べし。25 また立ちて祈るとき、人を怨むる事あらば免せ、これは天に在す汝らの父の、汝らの過失を免し給わん為なり』とおっしゃった。一番終りの句はマタイ伝の主の祈りの近所のところと非常に似ておりますけれども。木に命じて木は枯れるということから、キリストは、

「信じて疑わずば必ず成る」

ということ、そこを言われたわけです。信仰のことを語られたキリストの言葉のうちの最も大事なものの一つであると思います。

●祈りの家

しかも、そのことは、またその前の15節の、

15 彼らエルサレムに到る。イエス宮に入り、その内にて売買する者どもを逐い出し、両替する者の台、^{はと}鴿を売るものの腰掛を倒し、^{うつつわ}16 また器物を持ちて宮の内を過ぐることを免し給わず。

これは近道をしようにと思つて通るやつなんです。

17 かつ教えて言い給う『わが家は、もろもろの国人の祈の家と称えらるべし』
イザヤ書56章の言葉ですが、

と録されたるにあらずや、然るに汝らは之を「強盗の巢」となせり』¹⁸ 祭司長・学者ら之を聞き、如何にしてかイエスを亡さんと謀る、それは群衆みな其の教に驚きたれば、彼を懼れしなり。

と。このところでいわゆる宮潔めのことが出てきているわけで、ヨハネ伝では宮潔めのこととが始めの方に出ています。

「売買する者を逐い出し、両替する者の台、鴿を売るものの腰掛を倒した」



と。キリストが、神殿を祈りの家とされた。いつもキリストは外側を内側から満たしておられるので、キリストにとっては、泉のほとりであろうと、野原であろうと、山の中であろうと、あるいは、こういった神殿であろうと、どこでもキリストが祈るところ、即ちそれが祈り場である。

私たちはいずこにおきましても、これが祈りの場である。私が「幕屋」と申しているこの幕屋は——正に「出会いの幕屋」という言葉が旧約聖書にあるとおり——いたる所が幕屋であり、祈りの場である。無教会は、

「洗礼、聖餐は要らない。教会組織は要らない」

と言う。その通りです。けれども、私は今まで無教会で、祈りのことを、キリストがまた使徒たちが新約聖書において非常に深い消息を語っているところの祈りのことを、無教会で強調しているのをまず聞かなかったと言っているのだらうと思います。今、私は本当にそのことに気がつくわけです。

「無教会、無教会」

と言うけれども、一番欠けているものは祈りです。

無教会は研究をよくやりますよ。聖書の研究、ヘブライ語やギリシャ語。参考書を読んで、学者がどう言ったこう言ったと。微に入り細をうがって、研究をやっている。けれども、この祈りが一番欠けている。一番欠けているなんて言っては悪いかも知れませんが、とにかく、みな立派なお祈りをなさいますよ。けれども、そんな立派な祈りとか何とか、そういうことではない。

私たちは、皆さんも、いいですか、私はこの集会も決して、その意味において、祈りの世界で非常に満足すべきところに来ていると思いません。どうか、皆さん、祈りの世界でもっともっと深くっていただきたいと思う。それから、もっと単純であっていただきたいと思う。深いということ、単純ということとは決して矛盾しない。私は話の終りに、

「どうぞ、お祈りください」

と言うと、なかなか祈らない。どういうわけですか。もう遠慮はいらない。神さまの前に何を遠慮しているか。祈るということは、お互いに誰が祈っても一緒に助けて、神の世界にキリストの中に入って行こう、迎えようということなんで、キリストを迎えることをなぜ遠慮するか。どうか、その意味においてもっと単純に、子どもらしくあつていただきたい。それが一番大事なことなんですから。

今、集会所は即ち祈りの場である。私が語っていても、皆さんは聞いていても、即ち一番大事な質は何かというと、祈り心です。祈りは福音の生命なんです。何をするにしても、祈りが非常に大事です。それは事実、自分でそういうように生活してみれば分かる。もう時間は短くたって、長くたって、それはいい。



●無私の祈り

祈りの世界では、無私になるんです。我を通すのではないから。キリストの、神さまの御意を、聖意を聴くんですから。いわゆる宗教的とか何とかということではなくて、その時に判断する、右すべか左すべきかという時に、私心のない世界に入って、そこでは透明な理のはたらきも、神の天的な法則、理も働く。それから一番大事な質は愛ですから。そういうものが渾然として——分析はできませんけれども——動いていく。そして、それを聴けば、その無私的な、そして本当の道理を、道を——

「我は道なり」

という——この道理が、本当の天道が、天理が——天理教ではないけれども——靈法が、豊かな深い愛の心情のもとに動いていく。そこには間違いないはずです。人間だから、また実際、相対的な現実では、右しても左してもいい場合がある。

祈りが非常に大事なわけです。本当の確信とか、本当の豊かさが来る。祈りは自分の何かではないんですから。これはいつも神さまの、キリストの生命が、自分の中に来ることですから。それで力が来る。いわゆる観念的な祈りだったら、いくら祈祷会なんてものをやってみたところで、いわゆる教会でも、いわゆる無教会でも、幕屋にしたって、その点を怠ったらダメですけれども。皆さんの生命は何にあるか。祈りにある。自分の全存在が祈り的であるということ。

キリストが入城されて、真先に祈りの事態に、まるで神殿をひっくり返すように、非常にここで怒られた。キリストの聖なる憤り、聖憤です。聖憤の事態は一体何であったかという、祈りの場を汚したということである。これは

「聖霊に逆らう罪は赦されない」

とありますが、この祈りの世界をなくしてしまう世界はダメです。どんなに良きそうでも、これはダメです。聖書をお読みになるときに、読むこと自体がもう既に祈りなんです。聖書を読んで、御言が自分の中に化体かたいしてくるように読むということは、祈りがなければ化体してこない。祈り心で読まないと、体からだに化してこない。

「わが言は霊であり、生命である」

というんですから。御言は、聖書の言葉は霊であり生命であるというんですから、霊であり生命であるものを受けとるのは、祈りのアンテナによらなければ、受けとれない。そういう意味において、私たちはいよいよ深く、単純率直に、また深く祈りの皆さん一人びとりでありたいと、また祈りの集会でありたいと思うわけです。

●神の信を持つて

22 イエス答えて言い給う『神を信ぜよ。』

と。ギリシヤ語を直訳すると、



「神の信を持つて」

と書いてある。「神を信ぜよ」というのは、

「神の信仰を、神の信を、神信を持つて」

と書いてある。おそらくヘブライ語では、「エメツ・ヤーヴェー」「神のまこと」という言葉です。「まこと（真、信、誠）」という字は「アーメン」という字の元です。「まこと」という字は、漢字でどの字を書いてもいいが、「誠」というのは、神の言は成るんです。神の言は必ず成る。

「神の信を持つて」というのは、

「神のまことを持つて」

ということ。神は実現なしたもうところの、実現実行なさるところの方です。また、神さまは私たちに對して裏切らない。人間はひとを裏切ったりするけれども、神さまは裏切らない。

「神の信をただけ」

というわけです。素晴らしい言葉だね、この「神を信ぜよ」というのは。

「神の信を持つて」

ということです。

「在りて在らしめるもの」

は、「在らしめて在るところのもの」、それが本当の真実（信実）な存在である。思うことが、内と外が表裏してしまうものは真（信）ではない。内外が一如である。これが真（信）の世界だね。それが「まこと」の世界です。内も外もない。内は外であり、外は内である。これがまことです。言葉では、

「巧言令色、鮮^{すく}なし仁」

なんて、孔子が言っているけれども。「まことしやか」なんていうのが一番いかん。即ち、内外が相即していること。

政治の世界だつて、結局は一番の力強い政治はそれなんです。政治家とか外交官なんて、そういうひとつの巧みな、内外の巧みになるけれども。一番本当のものはやはり、グラッドストーンとか、リンカーンだとかいうような人を見ると、ケネディーもそうだったと思うけれども、やはり人間を本当に動かすものは、偽りなき世界です。

そういった神の信を持つ。そういった神の心。神心、仏心です。

源^{みなもと} 実朝^{さねとも}の、

「山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも」

（たとえば、山が裂けくずれ、海の水が干あがつてしまうような世の中になっても、大君に對して二心を抱くようなことはけつしてありません。）

とある。即ち、これは二心のないこと。実朝というのは素晴らしい歌人でもあり、すごい



った深い心をもった人でしたね。

「神といひ仏といふも世の中の人の心のほかのものは」

（神といい仏といっても、それらはみな人の心の中にあるのであって、どこかほかのところにいるというわけではないのだ。）

と。即ち、我々の心は神に通ずると言っただけいい。我々の心というものはみな、もともと神の子なんだから。仏教の方では

「いごとく仏性あり」

という。要するに、心は本当は無心の心である。心無き心が本当の心である。そういう心が、本然の心は神仏に通ずるわけです。それを「至誠」という。真心まごころという。誠心まことこころという。ちゃんとそういう言葉ができています。

藤井先生が、「真実、真実」なんて言ったのも、そういった気持ちもおありになったわけですから、けれども、いわゆる「真実」なんて言っただけで何か凝り固まると、変なことになってしまう。むしろ、そういった無心のこころです。私はどうも、ああいう「真実」というようなことを無教会であんまり言うから嫌になってしまったんだ。あの真実という言葉で、人を審くようなことになってしまう。それよりか、八方破れで、無心で、何も無い。何もありませんよ、私は。空無である。空であり無であるところの心だね。空であり無であるような心。そこにこの神の心が宿るから。その神の心はまことの心で――天真爛漫てんしんらんまんというけれども――正にこの「天真」なんです。天真という言葉の方がよっぽどいい。この天真です。そういった天真の神の心を、神の信を、誠を、神のまことを、神の真心を持てということです。

だから、一番大事なのは、「神を信ぜよ」という言葉の内容なんです。

「キリストを信ぜよ」

とは、

「キリストの心を持て」

ということですよ。持てますよ。無条件にいただくんです。これは十字架だから。十字架でもって、この私心がぬけてしまった。私心が十字架でぬけてしまっているんだ。だから、

「無条件に受けなさい」

と。「はいっ」と言っただけで受けて。これは祈りですよ、その世界は。十字架を受け取るのもこの祈りです。自分がはずれてしまった。神の、キリストの心をいただくのも祈りです。キリストも正に、

「われ何ごとをも為しあたまず。何ごとをも言えず。何ごとをも教えず」

と言われたキリストは神の中に深く入って、神の一切のものが入ってきた。それが「神を受けとれ」ということです。

「神を信ぜよ」

は要するに



「神を受けとれ」

ということ。

「キリストを信ぜよ」

は要するに、

「キリストを受けとれ」

ということです。キリストの本願を汝の悲願とせよと。それが大前提ですから。それを受けとったら、今度は発するぞと。

●キリストの心を入れる

²³ 誠に汝らに告ぐ、人もし此の山に「移りて海に入れ」と言うとも、其の言
うところ必ず成るべしと信じて、心に疑わずば、その如くなるべし。

と。

「それでは俺は途方もないことをひとつ考えてやろう」

なんて、それはダメですよ。そんな無法なことを言ったって。キリストはそういう乱暴のようなことをおっしゃいましたけれども。あんまり信仰がないから、少し凄いことをおっしゃったけれども。この

「山に移りて海に入れ」

とは、

「お前の心を取り出して、キリストの心を入れる」

ということですよ。

「必ず成る」

という。必ず成る。山が移ってどうのこうのなんていうことよりも、一番素晴らしい変化は何かというと、我々の心がキリストの心と変えられる変化。これは最大の変化です。心を回らす「回心」というけれども、それはただごとではない。パウロのあの義がキリストの義で変えられたでしょ。

「わが義にあらず、汝の義が」

と。キリストという義がパウロに——パウロの義が棄てられて、塵芥のちりあくたの如くになって——キリストという義が彼の中に住んできたなら、あの大使徒パウロとなった。我々は器は小さいといえども、同じことが我々の中で起こる。それは「山が移る」どころの騒ぎではない。もつと素晴らしい変化です。原始力的な変化です。原始力的な変化が我々の心の中に起こる。これが起こったら、皆さん、「もう、何をか」というわけです。それは本当の信です。

「神の信を、キリストの信を受けとれ」

とは、自分のものをしまっておいて受けとったって、それはダメですよ。そんなものは放り出さなくては。自分のものは放り出して——十字架でもって放り出されるんだから——



放り出されたら、ちょうど核分裂だか何だかしらんけれども、新しい核が、霊核が入ってきたら、それはもう大革命ですよ。これが即ち、聖霊のバプテスマということです。だから、
「聖霊のバプテスマをそこに起こせ。しからば、お前は、心に信じて疑わずに、必ず成る」と。
疑ったり恐れしたりしたらダメだ、必ず成ると。

●キリストは最高の霊

こないだ、ある人が集会にいらつしやた。相当、仏さんの世界で、観音さんの世界で本当によく祈る人です。ちよつと祈り三昧になりすぎるくらいに祈る。けれども、お稲荷さんか何かが、狐の霊が災いした。あの方は非常に祈りの深い方なんです。けれどもちよつと、相手が悪かった。お稲荷さんみたいなやつがじゃましていた。家の中にもお稲荷さんがあつたらしいね。日本はとにかく、百鬼^{ひやくき}昼行^{りゅうぎょう}ですからね、「夜行」でなくて。いろんな神さままだ何だかしらないけれども、いろんなのがありますから。それで、行き詰まってしまったから、飛行機で飛んで来られたわけです。私の名前が、祈っていたら出てきたそうさ。

「福音の証者小池のところへ行け」

というようなわけで。そして、この集会にいらつしやった。福音の世界に入った。それで、こないだぶつ倒れてしまったわけです。私は狐がついているなと思ったから、窓を開けて、
「聖名によって出よー」

とやったわけだ。これは福音書と同じなんです。そういう福音書と同じことが起きた。この人は福音の世界に入つて、もう毎日一時間以上、聖書を読んでいるそうですが。

キリストの霊によって、本当に御言の中に祈りをもつて今度は入ってきたら、キリストは最高の霊ですから、何の恐れもない。

「心安かれ、我なり、^{おそれ}懼るなかれ」

と。どうか、皆さんも、こういうことがありましても、どんなに悪霊が強くて、キリストにはかなわんですから。決して、ご心配なく。そのかわり、空念仏ではダメですよ。本当に心をこめて、

「主さまー」

と。この一言で、キリストを呼べば、他の霊は恐れる。霊の方が恐れて、苦しがつて出ていく。

キリストとキリストの御言は——聖書の御言をないがしろにしてはいかんですよ——御言と霊とは、霊と言は分かつことができません。あなた方は、いざという時には、聖書のただひとつの簡単な言葉が本当に力になりますから。その言葉の最後はもう「キリスト」だけです。「キリスト」という聖名だけです。



●すでに得たりと受けとれ

その中に入れば、必ず成る。現象面は、どういう現象面が表れてくるか知りませんよ。その時に自分が願っていたような現象が出てこなくなっているじゃないですか。現象に囚われないように。自分を棄てて、キリストの御意を、神の御意を求めて、そして、祈っている願いは、たとえその時に明確に把握できなくても、必ず成っていきますから、それを信じて進んで行くことです。そうすると、必ずある時にははつきりと、内容的にも示されることもあります。ちよつと分からないからと言って、いい加減なところで諦めたりしたらいかん。祈り続けて、祈りぬくことが大事です。祈り続けることが大事です。それは自分の意志が成るのではないから。汝の意志に託しているんですから、それはもう率直に、遠慮なしに祈ってください。そして、究極のところはいつも、

「神さま、主さま、あなたの御意が成りますように」

ということですよ。そうすれば、それを聖霊は執り成して、善きに変えてくださる。そういう大安心感と喜びをもつて、信頼をもつて、どしどし祈りかかっていかなくても、

キリストがエルサレムに入城されて、それから一遍、ベタニヤに行かれたけれども、その次の日に、この二日目に、特に祈りのことをそのようにして言われた。このことと、第一日の御用とは正に一つなんです。その御用を本当に果たすためには、汝の意志を受けとるためには、この祈りの世界が、かくもキリストが示されたところの、

「^{すべて}凡て祈りて願う事は、すでに得たりと受けとれよ」

ということですよ。完了ですよ。だから、祈りに力が入るんです。

「何々してください」

と祈っていて、

「いつ成るだろうか？」

なんていう気持ちで祈ったってダメですよ。「してください」と祈っている直下に、成っていることを確信しながら進んで行かなければ。始めはどんなに苦しくたって、必ず祈りの終りにはもう讚美に変わる。詩篇を見たってそうでしょう。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたもうか」

とやっているかと思えば、終りの方では神を讚美している。詩篇22篇を見てください。

あるがままの姿を投げかけることが「まこと」ではないですか。行き詰まっていれば行き詰まっているままで、分裂しているならば分裂したままで、投げかけていけばいい。そうすれば、そのまことが、取り澄まざるまことが通ずるんです。

「もつと、こつちの気持ちを整えてから、もつと聖書を読んでから、祈りましょう」
なんて言ったって、そんなのはダメです。では、おしまい。

